

## 論文の内容の要旨

論文題目            英語教育における文学教材の意義—事例分析による再検討—  
(The Role of Literary Texts in EFL Classrooms: A Reexamination Through the  
Analysis of Case Studies)

氏 名            久世 恭子

本論の目的は、英語教育における文学教材の意義について議論することである。本論では、日本の英語教育における文学教材の位置を歴史的に確認し、英米での歴史や理論を踏まえた上で、日本の大学英語教育における授業事例を複数分析することによって、これまで主として理論的な側面から議論されてきた文学教材の意義と問題点をより実証的な観点から再検討する。それと同時に、条件の異なる様々な授業における文学教材の多様な教授法や活用法を提示することを目的とする。

本論は、7章から構成されるが、各章の概要は以下の通りである。

第1章は、序論として、「研究の目的」「研究課題」を示し、「用語の定義」を行う。本論では、上述の目的を達成するために、4つの研究課題を設定する。1) 日本の英語教育、及び、英米を中心とした世界的な第二言語・外国語教育における文学教材利用の歴史は、それぞれどのようなものであるか、2) これまでに主張されてきた英語教育における文学教材の意義と問題点には、どのようなものがあるか、3) 日本の大学の英語授業では、実際にどんな文学作品がどのように使われていて、学習者たちはそれらの文学教材や活動に対してどう反応しているのか、4) 授業事例の中に、これまで主張されてきた文学教材の価値・意義、また、問題点は見られるのか。また、問題点を解決する方法があるとしたらそれはどのようなものか、の4点である。

続いて、本論中で用いる用語のうち、「英語教育」「文学、文学的」「文学教材」について定義を行う。「文学」については、先行研究において示されてきた特徴の中でその中心に位置するも

のを意味するとし、「文学的」という表現も併せて用いることとする。そして、本論で研究対象とするのは、創造性があり、想像力に富み、ある程度解釈の自由が読者に与えられるようなテキストで、作品ジャンルとしては、小説・詩・戯曲・随筆・児童文学・歌詞・手紙・自伝・日記などであることを明らかにする。

第2章では、第3章以下の議論を進めるために必要な、歴史的考察と先行研究のまとめを行う。本章は、英語及び外国語教育における文学教材利用の歴史の考察と、文学教材利用についての先行研究の概観の2部構成で、いずれも日本国内と英米の両方の文脈から議論する。まず、日本における文学利用の歴史を明治時代初頭から現在まで辿り、特に、戦後の中等教育の学習指導要領の変遷に伴い文学教材が徐々に排除されてきた過程を説明する。これに対して、英米では1980年前後に、教育的文体論とCLT (Communicative Language Teaching) の発展を主な要因として言語教育において文学教材を再評価する動きが起こったことを確認する。そして、このような再評価が日本で本格化しない理由として、文学を使った場合の教授法に固定観念があることや経済界からの要請などにより実用英語が過度に重要視されてきたことなどを指摘する。第2章の後半では、Widdowson (1975) 以降のこの分野の主な先行研究をまとめ、文学教材の意義についての理論的な研究が進むにつれて、現在では、それを支持する実証的な研究、特に、個人の学習過程や教室での授業の進行に関するデータ収集や学習者の反応の分析に関心が集まるようになってきたことを説明する。

第3章では、英語・外国語教育の中で文学教材を使うことの意義と利用の問題点について、先行研究に独自の視点を加えて整理する。本章でまとめる意義と問題点は、授業事例のデータを収集する際の理論的な枠組みとし、また実践や観察を行う際に特に注目する点とする。文学教材の意義は、Carter & Long (1991) のモデルに準じる3つの主張、「言語に関する意義」、「感情や人間形成に関する意義」、「文化に関する意義」と、それらに区分できない「その他の意義」にまとめる。さらに、文学教材の意義の主張を批判し、「外国語教育において文学に特別な役割はない」と結論づけた Edmondson (1997) の反論を紹介する。

第3章の後半では、文学教材使用に伴う問題点を探るため、Hirvela (1989) の「語学教師が文学を避ける5つの理由」を端緒に、これまで渾然一体となって体系的に整理されることのなかった諸問題を、「文学読解の難しさ」「コミュニケーション能力との関係」「ESP/EAP との関係」「評価に関する問題」に分けて詳説する。そして、それぞれの区分の中で何が文学教材を使いにくいものになっているのか、それに対して解決の糸口はないのか、についても論じる。

第4章では、第5章で行う事例研究の概要を述べる。事例研究の目的は、実際の教室での実践と学習者の反応を綿密に調査し、記述し、分析することによって、日本の英語教育における文学

教材の意義や問題点を論じることであることを、まず、明確にする。その中で、この分野の実証的な研究が世界的にも希求されているにも関わらず、まだ不十分であることの理由にも触れる。続いて、本論の事例研究の方法論を示す上で中心的な概念である、「質的研究」「事例研究」「観察」「アンケート調査」「倫理的配慮」について説明する。研究の具体的な方法の選択については、複数の手法を組み合わせる *triangulation* の重要性を強調する。第5章の事例研究は、教授法や文学教材の使い方によりカテゴリーに分けて論じるが、それぞれの事例の条件や扱う文学作品、また、本論で採用するデータ収集や分析の方法を章末に一覧表にする。

第5章は、内容的にも分量的にも本論の中心となる章である。主として教授法に注目して全21の事例を8カテゴリーに分類して節を立てる。それらは、「伝統的な教授法を用いた事例」「Language-based approaches を取り入れた児童文学の授業例」「Communicative Language Teaching を用いた事例」「Composition で文学を使った事例」「Extensive Reading の教材としての文学」「ESP/EAP 中での事例」「メディアを使った事例」「言語横断的授業での事例」である。各カテゴリーに属する事例の数は1から4と異なるが、各節では、それぞれの事例の授業展開・教室談話・ワークシートへの記入内容・アンケートやインタビューから得られる学習者の反応を記述、分析し、それらに基づいた考察を行う。

第6章では事例研究の総合考察を行う。第5章でカテゴリーごとに行った考察を統合し、第3章の枠組みに應える形で、事例研究の分析から得られた文学教材の意義と利用に伴う問題点を総合的に論じる。その結果、先行研究で主張されている意義は事例の中に様々な形で見られ、しかも相互に関連し合っていることを指摘する。文学教材利用に伴う問題点については、従来から指摘されているようなテキストの長さや難解さに伴う問題なども認められるものの、作品選択を適切に行い、使い方を工夫することで解決できるものも多いことを具体例と共に示す。また、コミュニケーション能力や ESP を主眼とする授業など、これまで先入観や偏見により文学が入る余地がないとされてきた実践の中にも文学教材利用の可能性があると主張する。最後に、文学教材を存続させていくためには、教職課程や教員研修などで、教員が教材としての文学の有用性を認識し多様な使い方を学べるような機会を増やすべきであるという提案を行う。

第7章では、各章の要約と結論を述べた上で本研究の反省を行い改善点と今後の課題を記す。本論の結論として、文学教材は、英語教育において特別な役割を担う有用な教材であることを主張する。文学的なテキストは、本論の事例で示したような英語教育の様々なコンテキストで、上級者から初級者に至るまで読む楽しみや創造的に解釈する機会を与え、多彩な言語活動を提供する。そのような特徴は軽視されるべきでなく、従って、文学教材は、学習者の言語習得を促し人間形成に関わる重要な教材であると結論づけられる。